

水と歴史

1587年(天正15年)、豊臣秀吉は、佐々成政に肥後の国守を任命します。成政は、入国早々「検地」を行います。国内の抵抗(肥後国衆一揆)に遭います。この失敗のため成政は、切腹を命じられます。

翌年の1588年(天正16年)肥後熊本藩の初代藩主となる加藤清正(1562年~1611年)が、二重峠を越えて入国しました。峠の頂から白川の流れや大津方面を望んだ清正は、案内者に土地や川のことを詳しく聞いていたそうです。

そして、肥後に入国後初めて行ったことが、下井手の作り直したったと言われています。清正は土木技術にとっても優れていたと言われ、白川から用水路をつくり、水を引くこと

で土地に多くの水田を増やし、人々の暮らしを安定させようと考えたのです。下井手が完成すると、今度は上井手の計画に取り掛かります。しかし、清正は1611年(慶長16年)に亡くなってしまいます。そこで息子の忠広が父の計画を引き継ぎ、1618年(元和4年)に上井手の工事を始めます。しかし、上井手を完成させるのは、非常に難しく、一度は掘削を進めたものの失敗してしま

います。結局上井手が完成するのはそれから38年後のことでした。下井手や上井手などの水路が完成し、水が豊かになると上井手に沿って町並みができます。それは「塘町筋」と呼ばれるようになります。

水がすべてをつなげていたのです。する仕事も盛んになりました。その米の粉を使って、大津の銘菓「銅銭糖」は生まれたと言われています。

り、参勤交代の宿場町として栄えていくことになるのです。水が流れ人が集まり、水が流れ水田ができ、井手の完成によって地域に潤いがもたらされました。水車の動力にも使用され、水車で米を粉に

する仕事も盛んになりました。その米の粉を使って、大津の銘菓「銅銭糖」は生まれたと言われています。水がすべてをつなげていたのです。



旧下井手の取水口



旧上井手の取水口



白川

大津町の水の歴史

- 天正一七年(1589) 加藤清正が下井手の工事に着手。
- 慶長三年(1598) 下井手が完成。
- 元和四年(1618) 加藤忠広が、上井手の掘削に取り掛かる。
- 寛永九年(1632) 上井手工事、一時中断。
- 寛永一三年(1636) 細川忠利が上井手の工事に再び取りかかる。
- 明暦二年(1656) 上井手が坪井川まで完成する。



加藤清正(かとう・きよまさ)

安土桃山時代から江戸時代初期にかけての武将・大名、肥後熊本藩初代藩主である。豊臣秀吉の家臣として仕え、各地を転戦し武功を挙げ肥後北部を与えられた。秀吉没後は徳川氏の家臣となり、関ヶ原の戦いの働きによって肥後熊本藩主となった。「賤ヶ岳七本槍」の一人である。